

セイシはセイシ

澁谷 繁樹



入来とのつき合いは、二十代で当時の南日本新聞社川内支社に赴任して以来だから、もう四十年になる。営業運転を開始しようとしていた川内原子力発電所の担当記者としての北薩回りだったけれど、名字が名字で親近感を持たれたのだろう、入来の県議会議員、町長、郷土史家とウマが合い、雪、桜、蛍とそれぞれ季節に見送られ、ほろ酔いだったり前後不覚だったりしながら、川内のアパートまで帰る夜が続いた。

郷土史家が主催する入来文書の講話会ものぞいたのに、結局モノにならず、主催者から「アナタが一番、知っておかないといけない

んですよ」とシツタされた。反省して努めればいいものの、つい口ごたえしてしまう。「だいたいにしてから、歴史つてのは、権力を持つ側が自分の都合に合わせて書いたもんじゃないんでしようか。セイシはセイシだから、所詮、男のキレイゴトに過ぎないという歴史学者もいますし」

セイシはセイシ、は、正史は精子、になる。どこかで聞きかじったか、読み拾いしたに違いない気の利いたセリフをつぶやくと、謹厳実直な郷土史家は「これだから、新聞記者は」と、さっさとサジをはるか遠くに投げてくれた。

ホントカイナと眉に唾を塗るのは、新聞記者として悪い心がけではない。「ゆきくれてきのしたやみをやどとせばはなやこよいのあるじならまし」。いい歌だな、と感心する。現代の家なきオジサンたちが口にも上しても似合う、

時代を超えた傑作をつくったのは、薩摩守平忠度。源平合戦の一環で追いつめられた際にしたためた、まではいいとしても、殺害した側が検分中に鎧の下から発見して落涙した、となると、ふうん、なるほどねえ、と指を舌にやりそうになる。

そもそもカミサマたちが寄ってたかってつくった国だから、一首の情趣あふれる誕生日語にイチャモンをつける気はない。ないけれども、首は傾げてみる。目つきが悪いと言われようが、そういう簡単に納得しては、仕事がすたる。江戸幕府は、なにかといっちゃ、薩摩藩をつぶそうとした、と講釈を受けても、せつかく南の未開地を治めてくれているのに、わざわざ面倒なお取りつぶしを考えますかね、と頭は回る。

強すぎるのも困るが弱すぎるのも厄介くらいのところ、マアマアアアと中央と周

辺が折り合いをつけていくのが幕藩体制ではなかったかくらいの視線で書いた記事も書いている。

「薩摩大隅鹿兒島表高七十二万八千石自体が侍だらけの藩だった。一八七一（明治四）年の記録を見ると、薩摩の土族の人口に対する割合は二割六分に達している。

土族を簡単に説明すれば、平民（一般の人）と華族の中間の身分を指す。華族とはなにか、天皇以外の天皇の家族他親類を表す皇族（皇后や親王など）と土族の中間、一七八四（明治十七）年の法律で公爵や伯爵など爵位の称号をもらった人たち（明治維新の功労者など）になる。一九四七（昭和二十二年）廃止。土はさむらいとも読む。「昔はそれなりの武士」だった家系が土族と考えればいい。

全国の土族率は6%前後、薩摩の26%は群を抜く。

住民の四人に一人が侍関係とは多すぎないか、加えて幕府の政策は「一つの国には一つの城」なのに、薩摩は藩内をほぼ百十の地域に分け（外城）、それぞれ役人（外城衆中）が常駐して治めている、現実には城があるわけではないにせよ実質は城を百十構えた行政形態じゃないか。

いっばいいる侍がひよつとして攻めて来てもしたら大変とでも考えたのだろうか、一六三三（寛永十）年、薩摩の一般情勢を調査に出張してきた幕府の役人が、薩摩の家老に聞く。「ちよつとお侍さんがいすぎませんかねえ」。家老は、頭をかきかき答える。

『いやあ、それが、あなたが、なにせ最盛期には九州を一手に握ろうとした藩ですから、雇い入れた武士がはんばの数じゃなくて、鶴丸城下は土地が狭いし、役人の分散居住は仕方ないんですよ。各地にある城みたいな立派

な役人の屋敷ですか、あれはそれ、ご案内の通り、当地はシラス土壌で、家をつぶすとなったら土地も崩れるかもしれないから、壊すに壊せずに』

さすがに大きな藩の家老ともなると一筋縄ではいかない。質問した幕府の役人は苦虫をかみつぶした顔のまま江戸に帰っていったろう。薩摩の家老は、一門家（越前、加治木、垂水、和泉四家）、一所持、一所持格（日置、北郷、川上など四十二家）、寄合（二階堂、義岡、平田など五十四家）の計百家の出身者のなかから選ばれる（二〇〇四年三月九日付南日本新聞「宝暦治水250年 薩摩義士たり語りから抜粋」）

連載九十回をほぼ同じ目線で書き進めたけれども、イチャモンはつかなかった。歴史物は一言居士が多いから文句を言われても待ち構えていたのに拍子抜け、史料をよく読み

込んでいるとのオホメを頂いたりして、付け焼き刃記者は隠れる穴を探しまくったりしたのを思い出す。

入来についても歴史物語をとの依頼を何回も受けて、そのたびにはぐらかしている。最近「イリキインテイコサンが書き尽くしているじゃないですか」を、言い訳にしている。天国に行っても大学の先輩はありがたい。人格識見はるかに遠く及ばない後輩は、先輩が残した書を指折りながら、不埒にも原稿を断る口実にしている。その度に「シブヤチャン、アノネエ」とオチョボグチのお小言が聞こえないでもないけれども、センパイねえ、だいたい、アナタがいけないですよ、仕事を抱えすぎるから、人生をあんまし急ぎすぎるから、ソウデシヨ。

（鹿児島県NIE教育に新聞を推進協議会事務局長）



新平和同願観音菩薩像（平成8年4月建立）

渋谷五族下向750年、終戦50年記念事業として、入来院氏の菩提寺であった寿昌寺跡（薩摩川内市入来町）に建立された。